
たすけ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たすけ

【Nコード】

N2813G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

かつては名うての暴れん坊だった住職さん。けれど今の様な落ち着いた人格者になるまでには。人の変わる姿を書いてみました。

第一章

たすけ

「僕はねえ」

今僕の目の前にいる人の名前を三神さんという。温和な顔でいつも笑っている人だ。

「昔は悪かったんだよ」

「昔はつて」

「若い頃はね」

三神さんの若い頃の話だった。

「色々あつたんだよ。喧嘩もしたし」

「はあ」

「博打もやったよ」

ここで昔を反省されたのか悲しい顔になる三神さんだった。

「その場で。ヤクザ者と喧嘩もしたよ」

「ヤクザ屋さんですか」

「うん。本当に色々やったよ」

語りながら昔のことを見ておられる顔だった。悲しくもあるがそれでも見ている僕から見れば徳のあるとても素晴らしい顔だった。

「色々ね」

「一体どんなことがあつたのですか？」

今僕達はあるお寺の境内で話をしている。実は三神さんはこの住職さんなのだ。周囲からもとても徳のある素晴らしい住職として知られている人だ。

「三神さんには」

「それはね」

「それは？」

「下らない話だよ」

前以つてこう言ってきた。

「それでもいいかな」

「はい、是非」

僕にとっては下らない話ではなかった。だから是非にも言った。

「御願います。是非」

「それじゃあ。そうだね」

三神さんはここで一呼吸置かれこう言われた。

「お茶でも飲みながらね」

「お茶ですか」

「それと。ここだとあれかな」

今度は周囲を見回された。今僕達がいるのはお寺の境内で本尊の仏像もある。このお寺の仏像は阿弥陀如来だ。慈悲のある顔で座している。

「寒いかな、話すには」

「はあ」

「場所。変えようかな」

今度はこう僕に言ってきた。

「それでどうかな」

「三神さんさえよければ」

僕は三神さんにこう返した。

「僕はそれで」

「有り難う、実は僕も歳だね」

「はあ」

「それでどうにもこうにも寒くて仕方がないんだよ」

「そうなのですか」

確かに今は冬で境内も寒い。若い僕でも寒いのがからもう六十をとうに過ぎておられる三神さんにとってはかなり厳しいのは予想がつくことだった。

「それでは」

「うん。居間でね」

「わかりました」

こうして僕達は今に移つてそこに座布団を敷いて向かい合つて座つて話をはじめた。熱いお茶に羊羹が暖房の効いた部屋に置かれていた。

「すみません、どうも」

「何がかな」

「いえ、遊びに来たのにこんなことまで」

「ははは、気兼ねすることはないよ」

羊羹見ながら言う僕に笑つて述べてきてくれた。

「そんなことはね」

「そうですね」

「それよりも私の詰まらない話を聞いてくれるのだからね」

むしろ三神さんの方が有り難いと。こう言われるのだった。

「この位はね」

「はあ」

「ところでこの羊羹は」

羊羹を見て言われた。

「近所の和菓子屋。ほら、あそこの」

「山月堂の支店ですね」

「そこで買ったんだよ。それも僕じゃなくてね」

「三神さんではなく」

「信者さんが持つて来てくれたもので」

「そうだったんですか」

「有り難いことにね」

その有り難いという言葉のところで目を細めさせられるのだった。

「僕が買ったものじゃないから」

「そうですね」

「けれど。とても有り難いものだよね」

「そうですね」

その有り難いという言葉に僕は頷いた。

「それは。確かに」

「いい羊羹だよ」

また羊羹について言われた。

「昨日家内と食べたけれどこれがね」

「あの店の羊羹は確かにいいですね」

僕も結構鼻屑の店なのでそれは知っていた。

「それじゃあこの羊羹は」

「そう、美味しいよ」

「ですね」

「まあそれを食べながらね。よかつたら僕の話聞いてくれるね」

「はい。それでは」

「そうだね。まずは」

また遠くを見られるなつてから述べられてきた。

「あのことから話すか」

こうして三神さんの話がはじまった。それは僕にとってとても有り難い話だった。

三神さんは若い頃その地域でも札付きのワルだった。仕事は一応漁師だったが博打はする喧嘩はする女遊びはする。家に殆ど金も入らず本当にやりたい放題だった。

第二章

「あんだ、もうそれを持って行かれたら」

「五月蠅い！」

止める奥さんをぶん殴ってそのうえで博打に行くこともしよつちゆうだった。しかも家の金を強引に峯り取っていった。

それで勝てば酒に女で負ければ喧嘩だ。おかげで三神さんの家はポロポロでお子さん達も非常に困ってしまっていたらしい。

来る日も来る日もそんな調子で。それが何時までも続くかに思われた。

「ところがね」

「ところが？」

「これが報いだっただらうね」

寂しい笑みを浮かべて僕に言ってきた。

「身体を壊してしまっただよ」

「御身体をですか」

「そっだよ。実はね」

三神さんはここで御自身の腹を右手で押さえられたのであった。

「僕の胃は半分ないんだよ」

「半分ですか」

「腎臓も一個しかないんだよ」

「こつも言われた。」

「一個しかね」

「胃と腎臓がですか」

「十二指腸も少しないし。肺だっただよ」

「肺もですか」

「癌だっただよ」

こつ述べるのだった。

「癌でね。それで」

「それですか」

「最初に見つかったのは胃だったんだよ」
「こつ僕に言われた。」

「少し気分が悪くなって寝ていたら」

「寝ていたら？」

「どうされたんですか？」

「三神さんに尋ねた。」

「不思議なことなただけけどね」

「ええ」

「こつ断つてからまた僕に話してくれた。その時のことを。」

「三神さんは寝ておられた。その枕元にある人が座っていたのだという。」

「誰だ？あんたは」

「御前に話がある」

「厳しい顔をした男だったという。背中には炎を背負っていたらしい。そして右手には剣、左には縄があったという。随分と恐ろしい格好なのが僕にもわかった。」

「俺にか」

「そうだ。御前は死ぬ」

「こつ三神さんに言ったのだった。」

「このままではな」

「死ぬ？俺が」

「三神さんはその言葉に布団から起き上がられた。そのうえでその男に対して問うた。」

「俺が死ぬってどうということなんだ」

「今御前は病魔に蝕まれている」

「また三神さんに語った。」

「身体中は」

「？馬鹿を言え」

「三神さんは最初その話を信じなかった。男と向かい合ってからそ

の言葉を否定した。

「俺が死ぬ？そんなわけないだろう」

「何故そう言えるのだ？」

「俺は今まで病気一つしたことはない」

三神さんは頑健な身体をしておられた。だからこれまで多くの喧嘩や騒動も潜り抜けてきたのである。それだけ健康には自信があったのだ。

「それでどうして病気になるんだ」

「御前自身のせいだ」

「俺自身のせい？」

「御前は今まで悪事を重ね過ぎた」

このことを三神さんに言ったのだという。

「そのせいでだ」

「俺が悪事を？」

「酒に博打に喧嘩に女だ」

そのことが並べ立てられた。

「全てな。御前自身のせいだ」

「因果応報だっというのか」

「そうだ」

そついうことであつたというのだ。

「全ては御前のな」

「俺が。死ぬのか」

「助かりたいか？」

「当たり前だ」

この時三神さんは自分のことしか考えていなかったという。流石に死にたくはなかったのだ。どうやって助かるのかそのことを考えているのという。

「どうにかしてな。助かりたい」

「その為には心を入れ替えることだ」

男はここで三神さんに言ったという。

第三章

「心をな」

「心を？」

「そうだ」

男はまた三神さんに告げた。

「心を入れ替える。そうすれば御前は助かる」

「心を！？馬鹿を言え」

三神さんは男のその言葉を鼻で笑ったのだった。

「そんなことできるものか」

「できないというのか」

「当たり前だろう？俺は誰の為でもない。俺の為に生きてるんだ」

「御前の為にか」

「そうさ」

悪びれずに男に対して述べた。

「人間ってそういうものだろう？他の誰でもない」

「自分の為に生きているっていうのか」

「そうさ。違うのか？」

「どうやら御前はそれを知る必要があるな」

男は三神さんの話を聞いて考える顔で述べたのだという。

「そうか。わかった」

「わかったんなら消えるんだな」

「御前に一つ試練を与えよう」

男は三神さんに言ってきた。

「一つな」

「何だ？試練って」

「すぐにわかる」

そこでは答えようとしなかったのだという。

「すぐにな」

「すぐに？」

「そうだ。すぐにだ」

「また訳のわからないことを言うな」

「訳のわからないことをか」

「そうじゃないのか？」

「違う。だがそれもすぐにわかる」

男は厳然と彼に述べたのだった。

「すぐにな」

「ふん。何が何かわからないがな」

「我が御前に言うことはここまでだ」

後はもう言おうとはしなかった。

「それだけだ」

「さつさと消えるんだな」

「だが。また一つだけ言っておく」

男は三神さんの言葉通り消えようとしたところで最後に言ってきたのだという。

「助かりたければ心を入れ替えよ。試練を用意しておいた」

ここまで言っただけを消すのだった。三神さんが気付いたその時は目が覚めたところだったという。起きてみれば寝汗をびっしょりとかいていたという。

「それは夢だったのでしょうか」

「そうだろうね。夢だったんだよ」

三神さんは僕にこのことを語ってから微笑んで述べられた。

「間違いなくね」

「そうですか」

「そしてね」

ここでまた僕に言われた。

「この話はこれで終わりじゃなかったんだよ」

「はじまりだったんですね」

「それはわかるんだね」

「はい」

それはこの話の流れでわかった。三神さんの問いに静かに頷いた。

「それはわかります」

「それからだったんだよ」

三神さんは穏やかな笑みと共に述べられた。

「はじまったのは」

「その話は」

「うん。それはね」

「そうですね。やはり」

「本当にね。いきなりだったよ」

またここで御自身のお腹を押さえられる。

「普通に風邪だとばかり思っていたのに」

「そこでだったのですね」

「痛くとも何ともなかったよ」

また僕に対して仰ってくれた。

「全くね」

「しかしそれでもですか」

「まずは病院に行ったんだよ」

三神さんが次に取られた行動はそれだったという。とりあえずそ

の人の話は信じておられなかったらしい。

「病院にね」

「それで結果は」

「癌だったんだよ」

「癌ですか」

「そう。いきなり言われたよ」

そこで達観した顔になられたのを僕は忘れない。

「もう駄目だったね」

「手遅れだったと言われたんですね」

「うん。もってあと半年」

「半年……」

また随分と急な話である。僕だったらそう言われたらどうなってしまっただろう。そうしたこととも考え内心怖いものを感じながらさらに三神さんの話を聞いた。

第四章

「半年だったのですか」

「普通はもう駄目だって思うよね」

「はい」

その通りだ。僕もどうなってしまうか本当にわからない。だが多くの人は間違いなくそれで絶望してしまうと思う。おそらく僕も、と話を聞くうちに考えた。

「それは」

「僕もそうだったんだ。終わりだと思ったよ」

「そうですか」

「うん。本当に終わりだと思ったよ」

そのことを思い出すような目で語られるのだった。

「本当にね。それで思ったんだよ」

「何かをしようと思っただよ」

「そうなんだよ。もう残り半年しか生きられないのなら」

「そして何をされたのですか？」

「その人との話のままだよ」

また述べられるのだった。

「そのね。話のね」

「枕元でのお話ですね」

「そう。あの時のね」

昔を見るその目はさらに暖かく懐かしむものになったのだった。

「やってみようと思ったさ。どうせ半年しか生きられないのなら」

「それで」

「いや、本当に思いついただけだったんだ」

また言う三神さんだった。

「それでね。まずは」

「どうされたのですか？」

「癌のことを家族に話して」

「はい」

「そして」

それからまた三神さんの話が始まるのだった。

三神さんは家族に病名を話された。まず奥さんがこう言ったとい
う。

「そう。半年なの」

「そうだ」

蒼ざめた顔で奥さんに言われたのだという。

「半年だ。あとな」

「それでその半年の間どうするの?」

「まず酒を止める」

最初に決めたのはそれだった。

「酒を止めてだ」

「お酒を?」

「ああ。止める」

また言うのだった。

「完全にな」

「本当なのね」

「そして博打もだ」

「えっ!??」

「それも止める」

博打についても止めるのを決意されたのだった。

「そして女もだ」

「女もって」

「当然喧嘩もだ」

「じゃああなたが今までのこと全部じゃない」

「ああ。全部止める」

強い言葉と共に語ったのだという。

「そして漁師に専念する」

「本気なのね」

「本気も何も決めたんだ」

腕を組んでしっかりとした声で話し続けられた。

「俺はな。そうしたことは全部止める」

「半年の間でも」

「とりあえずはそうしてみる」

「とりあえずは？」

「そうだ。残り半年」

その半年という言葉がこれまでになく重いものになっていた。そうなったのはやはり枕元での男との会話の結果だった。それこそがはじまりであった。

「やってみる」

「あんた……」

「疑ってるか？俺のことは」

「そもそもあんたそんなこと言ったことなかったわよね」

「俺は嘘は言わない」

これは三神さんのこの時からの誇りだったという。何があっても嘘はつかない、どれだけ悪事を続けていてもだ。その心定めだけはずっとしていたのだという。

「それは御前も知ってるよな」

「ええ、それはね」

「その通りだ。それでだ」

「やるのね」

「ああ。絶対にだ」

三神さんの決意は不変だった。

「やるからな」

こうして三神さんはまず生活をあらためられた。そうして真面目に働き三ヶ月を過ごされた。その間三神さんを見る周りの目は変わっていった。

「嘘みたいだな」

「ああ、全くだ」

「あの人がな。あんなに真面目に」

「どういうことなんだ？」

中には首を傾げさせていぶかしむ人もいたという。

第五章

「何かあったのかな」

「何かが？」

「そうじゃないと変わらないだろう？」

「こうした見方も出ていた。」

「やっぱりな」

「じゃあそれは何なんだろうな」

「さてな」

「そこまでは誰もわからなかった。」

「そこまではわからないがそれでもだ」

「ああ、変わったな」

「そうだな」

このことだけは確かだった。確かに三神さんは変わられたのだ。た。

「あんなにやさぐれていて乱暴だったあの人がな」

「全く違ってるよ」

「まず酒も飲まないし」

「最初はそれからだった。」

「それに博打も女も喧嘩もな」

「全部しなくなったな」

「顔も変わってきていないか？」

「そういえば確かに」

「顔も」

次にその表情についても言われた。

「全くな。これまでとは全然違うよな」

「完全な別人になってるよな」

「そうだな」

皆三神さんを見てこう言い合ったという。

「何か雰囲気も全然」

「今までと違うし」

「穏やかになつたよ」

雰囲気についてもだつた。

「どつちにしる付き合ひやすくなつたよ」

「よかつたよかつた」

「全くだ」

皆は素直にそのことを喜んだという。しかしこの人達は喜んだだけでそれ以上は見ることもないし考えることもなかつたのだという。

「これで街も平和になるよ」

「善き哉善き哉」

これで話を終えた。ところがであつた。家族、特に奥さんにしてみればその違いはまさに切実であり切羽詰つたものでもあつたのだ。ある夜に三神さんは奥さんと御二人でこんなことを話されたという。お子さん達が寝られて御二人だけで誰もいない暗い居間で。話されたという。

「それであんた」

「ああ」

「あと三ヶ月だよね」

「そうだ」

三神さんに対して言われたという。

「あと三ヶ月だな。本当に」

「お医者さんは何て言つてるの？」

「同じだよ」

こう奥さんに返したのだという。

「あと三ヶ月だつてな」

「実際に言つてるのね」

「変わらないさ」

そしてこう返された。

「それはな」

「そう。変わらないの」

三神さんのこの言葉を聞いて今まで生きているうちで一晩落胆されたそうだ。

「それは」

「あと三ヶ月か」

三神さんは達観されて期限を述べられたという。

「短い長いか」

「短いわよ」

奥さんは今にも泣きそうな顔で述べられたという。

「三ヶ月しかあんだといられないなんて」

「おいおい、また随分と言っな」

三神さんは次第にやつれてきている顔で奥さんに対して述べられた。

「それまではあれだろう？」

「ええ」

その泣きそうな顔で御主人に対して頷かれた。

「そうよ。もう一緒にいるのが嫌で嫌で」

「それで別れたいって何度も言ったな」

「そのことは覚えてるわ」

やはり酒に博打に女といった無頼な生活を見ていて嫌気がさされていたのだ。それに三神さんは何かあれば奥さんやお子さん達に暴力を振るわれていたという。おそらくそれもあつたことは間違いない。

「子供を連れて家を出たこともあつたじゃない」

「ああ。七年前か」

「あの時は本当に別れようと思ったわ」

実際に僕もそれを聞いてよくそこで離婚にならなかったことだと思つた。しかしそうはならなかったというのも思えば何かの縁だったのだろう。

第六章

「けれど。あの時はたまたま」

「ああ、たまたまだったな」

「周りが止めてくれて」

親切な人達が止めてくれたのだという。これもやはりよくある話なのだろうがやはり僕はそこにもここに至る縁を感じずにはいられなかった。

「それで戻ったじゃない」

「そうだったな」

「それでもよ」

奥さんはさらに話を続けるのだった。

「私、ずっと思ってたわ」

「俺と別れたかったか」

「そうよ」

そのことをはっきりと三神さんに述べられたのだった。

「いつもいつもね。思っていたわ」

「それは俺もわかっていたさ」

当然三神さんもそれは感じておられたのだった。

「けれど。今は違うんだな」

「ええ」

また泣きそうな顔になられて頷かれたという。

「そうよ。絶対に」

「そうか。俺に死んで欲しくないか」

「今のおんたとは」

今の三神さんとは、というのだった。

「悪いことはしないで真面目に生きているおんたとは絶対に」

「遊びを止めただけなんだがな」

三神さんは奥さんの話を聞いてふと言ったのだった。

「それだけなんだがな」

「それだけでもよ」

奥さんは仰ったという。

「全然違うわ。顔つきだって」

「ああ、それは最近よく言われるな」

これは先の周りの話通りである。

「周りからな」

「それだけで全然違うのよ」

「そういうものか」

「そうよ。真面目に生きているだけで」

奥さんはまた三神さんに言われた。

「それだけで全然違うのよ」

「そういえばそうだな」

そして三神さんも奥さんのお話に頷かれた。

「今。何をしても気持ちが悪やかだ」

「そうなの」

「前は何をしてもささくれだっっていて気が立っていた」

「こう言われたという。」

「本当にな。ところが今はだ」

「何をしても穏やかなのね」

「そうさ。何をしても何処にいてもな」

このことを僕に言われる三神さんの目は実に澄み切っていた。そしてその澄み切った目で僕に穏やかに話されているのだった。

「そういうことだったんだよ」

「まず暮らしを穏やかにされてですか」

「うん。博打に酒に女に喧嘩に」

この四つを僕にも並べて述べられた。

「どれも過ぎるとね」

「身の破滅といますね」

「そう。どちらにしろあのまま続けていれば僕はね」

「破滅されていましたか」

「間違いないね」

過去を振り返られながら仰るのだった。仰りながらお茶を一口飲まれていた。

「どのみちね」

「そうですね。そうだったことはどれも」

「そう、少しならいいけれど過ぎると身を滅ぼすよ」

「ええ」

僕は博打と喧嘩には一切興味が無いがあの二つについてはよくわかるつもりだった。特に酒に関しては僕自身思い当たるふしが実に多かった。

「その通りですね」

「そう。まずはそれを止めるいい機会だったんだ」

「成程」

三神さんのその言葉に静かに頷いた。

「それにね」

「それに？」

「また一つある為の弾みだったんだらうね」

「弾みですか」

「そう、弾みだったんだ」

お茶を置かれてそのうえで法衣の中で腕を組んで述べられた。

「それはね」

「といいますと」

「ほら、僕にいきなり仏とか言われてもね」

「わからないというのですね」

「その時の僕にはわからなかったね」

「そういうことだった。その時の三神さんということだった。」

「絶対にね。神も仏も信じていなかったから」

「それを信じられるようになる為だったのですか」

「そしてそれだけじゃなかったんだよ」

まだあつたのだという。話は深まっていけばかりだった。

「本当にね。それからがはじまりで」

「はじまりですか」

「うん。そうして心を落ち着かせて」

まずはそれからだったというのである。

「そうして。あと三ヶ月を切って」

「ええ」

思えば時間としてはあまりに短い。話を聞いていてもまず助からないとしか思えない。三神さんはそれでよく己の運命を受け入れられたと思った。

第七章

「それからが本当のはじまりだったんですね」

「そうだよ。はじまりはね」

「はい」

「その時だったんだよ」

こうしてその時の話をはじめられた。話はさらに進むのだった。

三神さんはあと三ヶ月を切っても心は穏やかなままだった。自分でも驚く程その心は澄み切りそうして静かに日々を過ごされていた。その過ごされる中のある日。仕事をしていると目の前で同僚の船が沈んでしまっただけらしい。

「何だ!？」

「どうなっただんだ!？」

「転覆した!？」

そうなのだ。同僚の人が乗っている船が突然転覆してしまったのだ。思いも寄らぬアクシデントだった。

「おい、助けるぞ!」

「ああ!」

周りの人達はすぐに助けに向かおうとした。しかし日はまだ暗くあまり見えはしない。一歩間違えれば船に乗っていたその人をぶつけかねない。どう動いていいかわからない状況だった。

しかしだった。ここで三神さんは。何も考えず真っ先に海に飛び込まれた。そうしてそのまま泳いで転覆した船の方に向かうのだった。

「えっ、三神さん!？」

「まさか」

そのまだ暗い海に飛び込んで泳いで向かう三神さんを見て誰もが驚いていたという。それも当然のことだ。乱暴者、無頼でしかなかった三神さんが動かれたのだから。

だが次の瞬間には。周りの人達は蒼ざめてしまわれた。何故なら。
「おい、あれを見る！」

「なっ、鮫!?!」

「間違いない、鮫だ！」

「鮫が来たぞ！」

海の漁ではつきものだ。時折来る。漁師でその鮫を警戒しない者はいない。

海に三角のその背鰭が見える。かなり大きい。その大きさを見ただけでその鮫がかなり大きく危険な存在であることが誰にもわかったという。

だからこそ血相を変えたのだ。そして海に飛び込んだ三神さんに対して。

「三神さん、早くあがるんだ！」

「危ない！」

「このままではあんたも！」

だが三神さんには周りの言葉は耳には入らなかったという。そうして転覆した船の横にいるその人を見つけるとすぐに抱きかかえ。そうしてすぐに自分の船に戻ってその人を引き揚げ自分もよじ登ったのだった。その間の動きは本当に瞬く間だったという。一瞬だった。

「助かった……」

「二人共助かったんだな」

「ああ」

皆自分の船に登った三神さんを見てまずは安心した。鮫はこちらには来なかった。それは杞憂に終わった。しかしであった。皆三神さんを見て驚くばかりだった。

「三神さん、あんた今」

「自分が死んでもよかったのか」

「えっ!?!」

ここで気付かれたという。ずぶ濡れになった御自身のこと。

「何だ？」

「いきなり海に飛び込んで」

「鮫だつていたのに」

「海！？鮫！？」

「おいおい、とぼけたら駄目だよ」

「あんた今海に飛び込んで助けたじゃないか」

「なあ」

「助けた。俺が」

ここで周りを見回されたという。まだ黒い色にしか見えない海に自分の船。その小舟のエンジンのところにその人が肩で息をしてしやがみ込んでおられたのだった。

「この人をか」

「そうさ、今は」

「鮫だつて側にいたのにな」

「鮫が」

また周りを見回した。すると確かに鮫がいた。滅多に見られないような大きな背鰭を見せている。

「それでよく助けたね」

「いや、凄いものだよ」

「俺が人を助けたのか」

「ああ、そうさ」

「今助けたんだよ」

表情を消して呟く三神さんに皆はまた告げたのだった。

「あんたがね」

「よくやったよ」

「俺がか。そうか」

これは三神さんがはじめて人を助けられたことだった。しかしその時のことは御自身では何一つ記憶にない。本当に完全に無我で動かれたのだった。

「不思議な話だよね」

「はい」

僕は三神さんの今の言葉にも頷いて答えた。

「そんなことがあったんですか」

「そう。その時どうして自分が動けたか考えたんだ」

「どうしてですか」

「どうしてだと思っかな」

ここで僕に対して尋ねてきたのだった。

「それは。どうしてだと思っかな」

「それは」

問われるとどう答えていいかわからなかった。そもそも僕にはそれが何故かさえわからなかった。考えずに無意識のうちにそうした行動に出られるとは。

第八章

「それは。僕には」

「では僕が話すよ」

「ええ」

三神さんがここでこう申し出てくれたのでそれに頷くことにした。

「御願います。僕にはわかりません」

「まず悪い遊びを止めて心を落ち着かせた」

「そうでしたね」

また話は戻った。

「それで」

「そう。それでそれが自然に動けたきっかけになったんだよ」

「どういうことですか？」

「心が荒んでいなくて落ち着いていた」

三神さんはそのことを述べられた。

「そのおかげでね。このいざという時に」

「動けたと」

「僕が動かしたのじゃないよ」

また不思議なことを言われた。

「僕がね」

「といますと」

「そう、落ち着いて澄んだ心になっていたから」

首を傾げるばかりの僕に続けられた。

「仏様が動かしてくれたんだよ」

「仏様がですか」

「そうだよ。そうして僕に人を助けさせてくれたんだ」

「そうだったのですか」

「僕はそう考えていると」

ということであった。三神さん御自身の御言葉だと。

「けれどね。その時はまだそれがわからなくてね」
「はい」

「少し考えたんだ。それは何故だろうって」
「そうだったのですか」

「そしてもっと考えて」
「考えをさらに深くさせられたのだという。」

「考えて。それで出した結論は」

「それは一体」

「もっと人の為にしよう」

「それであつたらしい。」

「同じようなことを続けていれば答えは出るかも知れない」

「続けていればですか」

「その時は漠然とこう考えたんだよ」

「また述べられる三神さんだった。」

「その時はね」

「ただ続けていればですか」

「うん。思えばその時はその時でよかったんだ」

三神さん御自身のことを振り返られつつ僕に対して述べるのだっ
た。

「その時はね」

「ただ人の為にですか」

「まず己の生き方をあらため」

「はい」

「まずはそこからなのだった。」

「そして己を律していき」

「それから人の為にですか」

「思えばね。全て御仏の御導きだったんだよ」

「ここでまた暖かい目になられて述べられたのである。」

「全てね」

「御導きですか」

「癌になってあと半年と言われて」

「ええ」

「そして生活をあらためて」

実際に僕にもその時のことを再び話してくれた。

「そしてそれが身についてからやっとな人の為だったんだよ」

「それでやっとなですか」

「心がそれなりになっていないければ人はたすけられないんだよ」

「心がですか」

「無残な心の人には人はたすけられない」

これは僕にもわかる。どうして人の情がわからぬ者、その痛みや悲しみがわからぬ者に人がたすけられようが。三神さんの仰っていることはここではよくわかった。

「絶対にね」

「そうですね。全くです」

「以前の僕は無残な心だった」

「以前はですか」

「本当にね。酒に博打に女に喧嘩に」

またこのことをざっと述べられた。

「明け暮れていて家族に迷惑をかけて」

「そうした生き方をしていればですか」

「そう。荒んだ生活をしていければ心も荒んでくる」

「そうですね」

この言葉も僕にもわかった。生活はそのまま心になるということも。

「では。まずは生活を静かなものにされ」

「落ち着いた生活にしてね」

「それで心を入れ替えられてからだだったのでね」

「そういうことだったんだ。それができてやっとな」

「人をたすけることができた」

「それまでは考えもしなかった。いや」

言葉を変えられてきた。ここでまた。

「動くこともなかった。無意識のうちだね」

「その時みたい」

「そう。そして気付いたんだよ」

三神さんの言葉がここでまた澄んだものになられた。何故か話を進めることにその澄み具合がより清らかなものになっていっている気がした。

「人の為に動こうって」

「あと三ヶ月を切ってそこですね」

「何処までできるかはわからなかったよ」

その時のことを述べられるが僕にはどうしても緊迫した感じがしなかったのはやはり今目の前にその三神さん御自身がおられるからだろう。

「何処までね」

「ですがそれでもだったのですね」

「そんなことは構わなかったよ」

はつきりと仰った。

「その時はね。考えもしなかった」

「それよりも人の為にですね」

「そう。人の為に」

そういうことだった。

第九章

「動こうと思っただ。そして僕は動いたんだ」

「人の為に。進んですね」

「色々やったよ。ゴミ拾いや掃除といったこともね」

「それもですか」

「考えてね。それも人の為だと思っただ」

僕はここで正直拍子抜けしたものを感ぜずにはいらなかった。

何故なら先程のお話で我が身の危険を意識されることもなく海に落ちた人をたすけられたのだから。それと比べればゴミ拾いや掃除といったものは実に小さなものにしかならなかつたのである。

「それで。やってみただよ」

「それですか」

「これは人だすけじゃないって思うのかな」

「それは」

「正直に言っただいいよ」

口ごもる僕にこう言われてきた。

「何も怒らないし不快にも思わないから」

「ですか」

「だから正直に話して欲しいんだ」

「そうですね」

「だから。よかつたら」

「はい。それでは」

そこまで言われては僕も正直にならざるを得なかつた。そうして僕は今その己が考えていることを率直に三神さんに対して申し上げたのだつた。

「そう思います」

「ゴミ拾いや掃除は人だすけじゃないと」

「ええ。小さなことだと思えます」

僕は今自分が思っていることを本当にありのまま述べた。

「それは」

「そう。やはりね」

三神さんは法衣の中で腕を組まれたまま頷かれた。やはり怒ることもなく不快な顔をされることもなかった。本当にありのままの御顔だった。

「そうだと思ったよ」

「そうですね」

「僕も最初思ってたんだ」

それは三神さんもだったという。

「何が人だすけかってね。けれど」

「けれど？」

「考えるうちにね。思ってたんだよ」

本当に言葉のその澄み具合がさらに清らかなものになってきていた。

「何でも些細なことでもそれで人が喜んでくれるなら」

「それが人だすけだと」

「そう。だからゴミ拾いや掃除もはじめたんだ」

そういうことであった。

「それで。毎日続けてみたよ」

「毎日ですか」

「街中を歩き回ってね。時間があれば」

ゴミ拾いや掃除は確かに何でもないことだ。だがそれを毎日という流石にかなりのものだと思った。しかし三神さんはそれを毎日続けられたのであった。

「やったよ。毎日ね」

「そうですね」

「そうしたら。またできたんだ」

「また!？」

「そう、またなんだよ」

ここでまた、という言葉が出て来たのだった。

「またね。色々な人がお金がなくて病気で困っていたり親や子供のことで困っていたり」

「そうだったのですか」

「こうした普通の街の中でも困っている人は何処にでもいるものなんだ」

こう僕に言ってくれたのだった。これもやはり今まで三神さんが気付かれないことだったのだという。ゴミ拾いや掃除をして街中を歩き回るまでは。それまでは気付かれることはなかったのだという。

「そういう人達に気付いてね」

「人だすけを」

「お金をあげて病院やお薬を紹介したり」

「ええ」

そういうことまでされたのだという。思えばゴミ拾いから大変な動きである。

「家庭の不和には相談に乗ったりね」

「それもですか」

「気付けば。あと一月もなかったかな」

目を遠くにやられてきた。

「もうね。本当に」

「ではそろそろ御身体が」

寿命が近いのならばと。お話を聞くうちに思い尋ねた。

「いや、それがね」

「違ったのですか」

「そうなんだ。全然疲れを感じなくて」

「またそれは」

「不思議だよね」

「はい」

本当にそう思うしかなかった。死ぬまであと一月を切ったというのにそれは。どう考えても有り得ないと言いやうのないことで

あつた。

「何故でしょうか」

「それもね。わかつたんだよ」

「それもですか」

「そう。疲れを感じないのは確かに不思議だったよ」

三神さんはまた仰つた。

「顔もやつれていたのがむしろ頬が膨れてきて」

「頬が!?!」

「血色もよくなってきたんだよ」

これまた不思議なことであつた。死期が迫っているのにそれは。

話を聞けば聞く程わからなくなる、そんなふうになっていた。僕は何が何なのかわからなくなってしまうていた。

第十章

「身体中に力もみなぎって」

「余計に話がわかりませんが」

「けれどお医者さんは癌は進行しているというんだ」

「それですか」

「そう。けれどそれでも身体の調子はよかったんだ」

矛盾していると思えなかった。癌は確実に進行しているというのだ。やはりどう考えても有り得ない話であった。常識の中においては。

「とてもね」

「ですが癌は」

「そう。それはわかっていたよ」

三神さん御自身が誰よりもわかっておられることであつた。

「それはね」

「しかしそれでもですか」

「うん。僕は人だすけを続けた」

死期がもう間近でもそれでもだつた。

「無我夢中でね。その結果多くの人が助かったよ」

「そうですね」

「お医者さんやお薬で助かったり家庭の不和が収まったり」

「三神さんのおかげで」

「僕のおかげなのかな」

今の言葉を聞いてまた考える顔になられたのだった。

「果たして」

「!？」

今の言葉もまた僕にはわからないものだった。どうも僕のような浅輩にはわからないことが多過ぎる。三神さんのお話を聞かせてもらいながらこう思つばかりであつた。

「確かに僕は人だすけをさせてもらった」

「はい」

「けれど。それは僕の意志だったのか」

「違うというのですか？」

「それがどうかというとな」

三神さんは微妙な顔になられて僕に言うのだった。

「そこがよくわからないんだよ」

「わからないといえますと」

「御仏の御意志だったのではないかな」

不意にこのようなことも仰った。

「これまでのことは」

「御仏のですか」

「今はそう思えるんだ」

今は、というのであった。

「何故ならね」

「ええ、何故なら」

「もうあと一週間程度になった」

その死期まで、である。

「その時だったんだ」

「また何かが起こったんですか」

「そう。その夜のこと」

三神さんは話された。

「枕元にね。また」

あの男が出て来たというのである。そしてまた三神さんに不思議な話をされたのだった。

「貴方は」

「久し振りだな」

枕元から起き上がらせ正対して正座された三神さんに対して言ったという。

「また会いに来たぞ」

「私にですか」

「いい顔になったな」

次に男は三神さんにこう言った。

「前に会った時よりさらにな」

「そうなのですか。さらに」

「そう。そしてそれだけではない」

男は言葉を続けてきた。

「そなたの心もまた変わった」

「変わっているでしょうか」

しかしこう言われるとついつい首を傾げられるのだった。

「私はそれは。別に」

「いや、それは真だ」

男は謙遜ではなく実際に首を捻ってしまっている三神さんに対してまた述べた。

「変わったのはな」

「左様ですか」

「そう。そして多くの人を助けたな」

「私はただそこにいただけで」

「そう、そこにいた」

三神さんのこの言葉を指摘するのだった。

「そしてたすけをした。それこそが大事なのだ」

「そうなのですか」

「そなたのその中だが」

ここで男は話を変えてきた。

「既に病魔に蝕まれておる」

「はい」 94

この言葉にも落ち着いて頷かれたという。

「それはもう」

「わかっているな」

「そのつもりです」

取り乱すことなく男に述べられた三神さんだった。

「それはもう」

「あと一週間もない」

「そうですね」

「怖くはないのか？」

男は不意に三神さんに対して尋ねられた。

「そのことは」

「確かに気掛かりではあります」

三神さんは男の問いに対してまずはこう述べられた。

「それは。実に」

「しかし。いいのか」

「はい。生きるのもまた運命、死ぬのもまた運命」

三神さんは述べられた。

「ですから。あとどれだけ命が少なかるうとも」

「よいと申すのだな」

「今はそう考えています」

三神さんの静かな御言葉は続いた。

「何故か。今はそのように」

「そうか。わかった」

男は三神さんのそうした御言葉を聞いて厳かに頷いた。

「そなたのその心はな。それよりも人だすけだな」

「この命ある限り」

またしても強い言葉であった。

「それをさせて頂きます」

「あいわかった」

ここで男は強い言葉と共に頷いたのだという。

「そなたの心はな。完全にな」

「左様ですか」

「ならばしてみよ」

そしてまた言った。

「その命ある限りな」

「は、はい」

「そなたはまだ生きる」

「まだといますと」

「寿命は確かにあの時で半年しかなかった」

「ここで話は遡るのだった。」

第十一章

「あの時はな」

「それがまたどうして」

「そなたの行いを見てのことだ」

男は言ったという。

「そなたのな」

「私のですか」

「まずは不健全な行いを全て止めたな」

「はい」

その言葉に対して頷いた三神さんだった。

「それはまず」

「酒に博打に女に喧嘩」

この四つを男もまた並べ立てたのであった。

「その全てを止めたな」

「その通りです」

「そのうえで人をたすけた」

続いてそのことを告げたのである。

「海に飛び込みごみを払いな」

「何故かそれをしなければと思いましたが」

「ゴミ拾いや掃除のことである。これは御本人だけあってよく自覚されていた。」

「それで」

「それがまたよかったのだ」

男はここでこう言ったのだった。

「それがな」

「そうだったのですか」

「そう。それもまた人だすけなのはわかるか」

「何となくですが」

この時は三神さんにしろはつきりとはわかっておられなかったのだという。やはりそれがわかるのはその時ではなく後でということがやはり多いものである。

「それは」

「ゴミ拾いや掃除はその場を綺麗にする」

「ええ」

これはもう言うまでもないことだった。それだけでも随分と違うものだ。

「人はそれを見てどう思うか」

「清らかであることに心を安らかにします」

「そういうことだ」

男はそれだと言ったのだという。

「そういうことなのだ」

「そうなのですか」

「そうだ。人を喜ばせて笑顔にさせることが人だすけだ」

男の厳しい顔がここで少し和んだという。その後ろにある激しい炎もまた穏やかになって。

「だからだ。そういった些細に思えることもまたな」

「人だすけだというのですね」

「如何にも。そしてそういうことをしていけばだ」

「はい」

「色々と人が見えてくるな」

ゴミ拾いや掃除で街のあちこちを歩き来しることであるのは三神さんの先の話でもわかっている。話は全てつながっているのだ。た。

「人というものがな」

「人がそれぞれ苦しんで悩んでいるのが見えました」

三神さんはここでも率直に述べられたのだった。

「それを見ていると」

「たすけずにはいられなかったな」

「前はそんなことは思いもしませんでした」

「その前に見えもしなかったであろう」

「その通りです」

僕に話した通りであった。ここでは。

「そうしたものは一切」

「そこに至れば見えるようになる」

男はこう三神さんに言ったのだと。三神さんから聞いていて僕もここで至るそれが何であるのかおぼろげながらわかったような気になった。

「そうして動けるようになるのだ」

「そうだったのですか」

「そしてそなたは動いた」

人だすけにという意味であった。

「しかとな。私はそれを見ていたのだ」

「見ておられたのですか」

「私に見えないことはない」

こつも言っただという。

「人の世のことはな」

「それでは貴方は」

「私はそなたの命を延ばすことにした」

三神さんの問いには答えずにこつ言っただった。

第十二章

「そなたのな」

「といますと」

「これからも人をたすけるのだ」

男が急に光に包まれた。そうして。

何と穏やかな顔で背には後光を背負われたという。そう、それまでの厳しい姿形から急にその様な穏やかな姿になられたのである。

「その命でな」

「は、はい」

「そなたの運命は変わった」

その方はこう仰った。

「後はその運命を」

「人の為に」

「使うのだ。よいな」

最後にこう言い残されてその方はお姿を消されたという。それが話の終わりであった。話を終えると三神さんは僕に対して静かに微笑んで正面に座っておられた。

そうしてそこで。こう仰るのだった。

「こういうことだったんだよ」

「うつむ」

僕はその穏やかな三神さんの前に腕を組んで唸っていた。

「またそれは実に」

「凄い話だと思っよね」

「しかも不思議な話ですね」

こう言っ他なかつた。見れば三神さんはお茶もお菓子もかなり口に含まれているが僕は全くだった。ついつい話を聞いているうちに忘れてしまっていた。

「その様なものだとは」

「けれど本当のことなんだよ」
僕に対して言われたのだった。

「これはね。全てね」

「本当のことですか」

「そうだよ。今の僕を作ってくれたね」

「そうして今このお寺におられるのですね」

「前の住職さんがね。勧めてくれたんだ」

このことも僕に話してくれた。

「隠居するからその次は僕につてね」

「それでここに入られたのですね」

「最初は本当にそのつもりはなかったんだよ」

お坊さんになることがである。実は三神さんはお坊さんであるがその髪は剃ってはおられない。短くされているだけである。最近ではお坊さんでも特に剃っていないくてもいいという。もっともそれでも髪を染めたりヘビメタそのものにさせているお坊さんを見た時はかなり驚いたが。

「けれどね。それでもね」

「前の住職さんに勧められていますか」

「それもあつたよ」

やはりそれはあつたのだった。

「けれどね。それ以上にね」

「それ以上に」

「妻も子供達も周りの人達もね」

「勧めてくれたんですか」

「是非なつてくれてね」

勧めではなく御願いであつたのだった。

「それでね。断りきれなくて」

「それでしたのですか」

「うん。それでならせてもらったんだ」

そういうことであつた。

「ここのね。住職にね」
「そうだったんですか」
「漁師はその時に辞めたよ」
「これはわかった。やはり住職になるからである。」
「それでね。こうしてなって」
「はい」
「今の僕があるんだよ」
「そういうことですか」
「結局ね」
「ここでまたお腹に手を当てられた三神さんだった。」
「癌は完全には治らなかったよ」
「それはですか」
「うん、やっぱりね」
「こうは仰つていてもやはりその御顔は穏やかに笑っておられた。」
「そこまではね。流石に贅沢な話でね」
「そうですか」
「さっきも話したけれど内臓はもうかなりないよ」
「このことをまた僕に話してくれた。」
「それでもね。生きることができた」
「生きることはですか」
「そう。そしてこうして今も誰かの為に動くことができる」
「目の微笑みはこれまで以上に温かいものになられていた。」

第十三章

「有り難いことだよ」

「お腹のことはいいのですね」

「いや、全くね」

「いいと仰るのだった。」

「関係ないよ」

「そうですか」

「それよりも生きていられるだけ誰かの為に動きたい」

その言葉には遙かな先を見るものがあつた。

「それだけだよ」

「では今もですね」

「うん。そう思っているよ」

また僕に述べてくれた。

「そうね」

「わかりました。その御言葉」

「わかつてくれているのは嬉しいけれど」

ところがここで急に照れ臭そうに笑われてきたのだった。

「いや、こんな話ね」

「どうかされましたか？」

「詰まらない話だよね」

その照れ臭そうな笑みで僕に言ってきたのだ。

「こんな話。面白くないよね」

「いえ、それは」

とんでもないことだった。話を聞いていて引き込まれてそこから離れられない程だった。何が面白くないということがあるのだろうか。

「そんなことはありませんが」

「だといいいけれどね」

僕の今の言葉に幾分か気持ちをや元に戻されたようだった。

「こんなことでも貴方の心に残ってくれれば」

「残っていれば」

「それだけで嬉しいよ。僕はね」

三神さんは最後にこう仰った。そこで時間になり僕はお寺を去ることにした。するとそこでお寺の電話がなり三神さんが出て話をされて。急にいそいそと外に出られるのだった。

「どちらに？」

「いや、見送りはできなくなったよ」

「といたしますと」

「ほら、三丁目の岡本さん」

「ええ、あの人ですか」

あそこにお婆さんがいるのは知っている。

「その猫が子供を産みそうだね」

「猫がですか」

「すぐにお手伝いに行つて来るよ」

「こう言つて出られるのだった。」

「ほら、あそこのミケ」

「あのメス猫ですか」

ミケとはいつでも白猫である。それでどうしてミケというのかは名付け親であるそのお婆さんが知っている事情である。僕はよく知らない。

「そうなんだよ。だからすぐに行つてね」

「お手伝いをされるんですね」

「こういうのも大事だから」

「こう言われるのだった。」

「だからちよつと行つて来るよ」

「はい、それでは」

「悪いね、本当に」

重ね重ね僕に謝つてきた。

「何分すぐらしいから本当に」

「いえ、まあそれは」

送り迎えまでしてもらうと流石に悪いのでこのことはよかった。

「別に僕は」

「また今度うちに来てね」

「はい」

その言葉には笑顔で頷くことができた。

「それじゃあ」

「待ってるからね。それじゃあね」

こうして三神さんは急いでその三丁目の岡本さんのお家に行かれた。思えばこういう人だからこそ人だすけができるのかも知れない。また元からそういうものがあつたからこそその夢に出て来られた方も三神さんにそういうものを見せられる為にあえて癌にしたのかも知れない。僕はそんなことを思いながら自転車に乗って三丁目に向かう三神さんを見ていた。その背中はとても温かいものが宿っているように見えた。

たすけ 完

2008・12・26

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2813g/>

たすけ

2010年10月8日15時42分発行